

## 独庵玄光小伝 (一)

高橋 博巳

### 序

江戸初期の禅僧、独庵玄光（一六三〇〜九八）の「独庵」という号には、文字通り「孤独」ないし「孤立」の影が色濃く射している。私もつい独庵玄光は孤高の人のように思い込み、それが玄光一流の韜晦だと気付くまでに思わぬ時を要した。たしかに同時代の仏者のなかには、玄光の理解者は多くなかったろう。本人も天和三年（一六八三）五十四歳のときに、『独庵独語』に序して次のように記していたほどである。

吁、仮令い予をして叢林広衆の中に在らしむるとも、此の語、今日、説きて人に向かう可からず。豈に敢えて知を当世の賢明に求めんや。蓋し国土無尽、人物無尽なり。焉くんぞ百歳の後、万里の外、疎嬾、予が如く、迂闊、予が如き者有りて、一覽、迫爾として顔を独語に破らざることを知らんや。

玄光は三十九歳から四十五歳までの足かけ七年間、長崎の皓台寺で住職を務めたことがあり、じっさい「叢林広衆の中」に身を置いていたわけである。だからこれは仮定の話ではなく、経験済みのことだった。また長崎の一寺だけを相手にしていたのではなく、「当世の賢明」にもさほど期待してはいなかったようだ。そこで今は無理でも百年後あ

るいは万里の外には、必ずや耳を傾けてくれる人が現れるにちがいないと後世に期待をつないでいたのである。「迫爾として」とは、気分が寛ぎ楽しんでにっこり笑うさま。

ちなみにこの皓台寺（もとは洪泰寺）は、元和元年（一六一五）に一庭融頓（一五八七〜一六五九）が勅を奉じて、切支丹を説破し転宗を勧誘した由緒ある大寺だった。したがって住持補任は幕閣の連署をもって行われ、長崎の寺院の筆頭の位置にあったと『禅学大辞典』（大修館書店）には記されている。

ところで意外にも、先の玄光の「期待」の半分は間もなく実現した。清国の碩学、為霖道霈（一六一五〜一七〇二）から次のような序文が送り届けられたからである。

語に云わく、礼失して、之れを四夷に求むと。今日、支那の宗門は地を掃いて、意わざりき、日国玄光禪師に于いて之れを見んとは。詔法門の一大幸に非ずや。夫れ、名の標するに独庵独語を以てする者は、蓋し尽法界、唯だ此の一庵、庵の外に庵無し。尽大地、唯だ此の一語、語の外に語無し。学者能く是に即いて、之れを求むるときんば、則ち尽恒沙国土も亦た当に是の如く流通発揚すべきことを知らん。特り日国のみにあらず。敬して序を諸卷首に為りて、以て諸来者に告ぐ。

これを目にした玄光の喜びは、我々の想像を超えるものだったろう。それまで書物は中国からもたらされこそすれ、日本から中国に海を越えて伝えられたことはなかった。それが玄光の『独語』には、序文まで贈られて絶賛されたのである。「礼失して、之れを四夷に求む」とは、『資治通鑑』卷二十三に伝えられる「仲尼、言有り、礼失して諸を野に求むと」に依るか。そもそも孔子は「道行われず、桴に乗りて海に浮かばん」（『論語』公治長）と言った人である。

ところで、国内での反響はどうだったろうか？ たとえば無隠道費（二六八八〜一七五六）の「嬾庵稿の序」（『雑華集』卷三）に、

大雄氏の教え、大東に漸びしより以て還た述作に乏しからず。而して号して名家と為る者は、虎関・義堂・絶海・独庵の厩厩たる四家のみ。

と記されているのを見れば、曹洞宗内に玄光の読者がいたことが知られるばかりでなく、虎関師錬（一二七八〜一三四六）以下、義堂周信（二三三三〜三八八）、絶海中津（一三三六〜一四〇五）といった五山文学の伝統に連なる、高い位置づけだったことが知られる。仏教伝来以来のベスト・フォーに数えられているのである。道費はまた「達道字説」（同上、五）のなかでも、玄光の『護法集』の記述を「委曲弁明す」と紹介している。ただこのように少数の熱心な読者はあったにしても、玄光が期待したような読者は百年後には現れなかった。没後三百年の現在はどうだろうか？ そういうことでは、独庵は名前のとおり孤独な思想家だった。

とはいえ、その周囲には少なからぬ支持者がいたことも事実である。しかもそのなかには、江戸初期の幕閣を支えた酒井忠勝（一五八七〜一六六二）の後継である酒井忠直（一六三〇〜一八二二）・忠隆（一六五

一〜八六）・忠国（一六五一〜一八三）らほぼ三代にわたる酒井一族との交友をはじめとして、文人大名の鍋島直條（一六五五〜一七〇五）や諏訪頼音（一六二三〜一七〇四）らが含まれていた。そうでなくとも、いくら本人が百年後の読者に期待するといっても、これだけ多くの著書を次々と出版することは難しかったろう。独庵が何を考え、何をしようとしていたかを、今なおたどりなおすことができるのも、そのおかげである。本書は小著ながら、こうして明らかとなる独庵の生き方を再構成し、そのメッセージを三百年後の今日、正面から受け止めることを目指している。

### 1 独庵玄光とは誰か？

独庵玄光の出自はもちろん、少年時代を偲ぶに足る資料は極端に限られている。近世後期の儒者、西山拙斎（一七三五〜一七八八）が『間窓瑣言』（日本備林叢書2）で伝える玄光の出家の理由を髻髻とさせるエピソードが、私の知る唯一のものだった。それには某侯の臣、某氏の一児は、幼いころから拔き出た才知と勇敢さを併せ備えた利発な子どもだったが、継母の不倫相手に危うく殺されそうな場面で、機転を利かせて危機を脱したばかりでなく、逆に相手の命を奪うという天晴れ見事な対応に、藩当局もその果敢な行動を壮挙とする一方、しかし結果として継母を死にいたらしめたので、しばらく藩籍を削り隣国に追放のかたちをとって、事態が沈静するのを待ったという話が紹介されたあとで、これが玄光出家の理由に類似していると記されているのである。

玄光自身も「護法集自序」のなかで、

卑僧は本と貧賤に出で、剃髮染衣、饑寒を積門に逃ぐるのみ。

と述べて、出家は「饑寒」から逃れるための手段だったと明言している。事実、肥前佐賀の鍋島家の菩提寺である高伝寺で出家しているの  
で、佐賀近辺のどこかの藩士の子弟であつたろうという先人見のもと、  
資料調査のために佐賀の地を訪れたさい、玄光生誕の地に近いという  
寒若寺に案内されたときは、軽い驚きと同時に多少の違和感を覚えた。  
天才的な人物の誕生地としては、あまりに日常的な雰囲気の界限に見  
えたからである。しかしそのことを示唆する文献として、そのとき教  
えていただいた堤主礼の『雨中の伽』を読むと、そこには、

又袋村の産ニ玄光とて、河内国ニ寺もてる（世に河内の玄光と云）  
洞家たり。博文才人なりとぞ。水戸黄門光国（関カ）卿の儒臣舜  
水と、儒積筆陣したる人也。後に舜水いはれしは、今なれば玄光  
に負はせまじといへば、黄門、玄光も又今迄いたら、只はおるま  
じと笑ひ給ふと也。 （『随筆百花苑』15、中央公論社）

と記されている。『儒積筆陣』の相手は朱舜水（一六〇〇〜八二）で  
はなく、田中止邸（一六三七〜八七）であるが、このように佐賀を離  
れたあとの消息は不確かでも、「袋村の産」という地元ならではの情  
報は信頼してよいだろう。案内して  
くださった大園隆二郎氏によれば、  
その一帯は下級武士の住まいだった  
という。少年玄光が高伝寺に身を寄  
せるまえに、まず近所の寒若寺に入っ  
たとすると、いま境内の片隅で雨風  
に晒されて面貌の大半が原型を留め  
ていない小さな多面地蔵にさえ無関  
心ではいらなかった（図1）。これ



(図1)

によって過酷な運命に弄ばれた玄光少年の孤独な心が慰められていた  
かもしれないのである。そう思えば、にわかには立ち去りがたい気もし  
たが、むろん想像の域を出ない話である。

ところで先の書にはまた、割注のなかに「高伝寺ニ大衆の時、夜々  
学問にひそかに小灯燈を燈して、夜の明方まで書をよむ故に、鼻頭かゞ  
りニ黒成により顕れ、夫より床裏に出、あんどふ有り」とも記されて  
いる。灯明の明かりをたよりに読書に精励したことが、このようなか  
たちで伝説化したものであろう。

しかし何よりも驚かされるのは『日本洞上聯燈録』中の次のような  
記述である。

童稚にして敏捷、一を挙げれば十を知る。常に神人有りて、出入  
相随い、唯だ師のみ髣髴として之れを見る。髻年、州の高伝寺の  
天国和尚に従つて駆鳥と為る。夙に此の事有るを知りて疑わざる  
なり。竺墳・漢典、師授を借らず、一たび目を過れば則ち大義略  
ぼ通じ、永く忘れざるなり。国、之れを撫して曰く、吾が家の千  
里なり。前程、測る可からずと。 （『大日本仏教全書』110）

一読して並の「敏捷」ではなかったことがわかる。「一を聞いて十を  
知る」元祖は、孔子の一番弟子の顔回であるが（『論語』公冶長）、玄  
光はそれに加えて超能力さえ備えていたようだ。というのも「神人」  
が玄光の分身で、それが玄光自身にしか見えなかったというのである。  
しかし、のちに師となった天国和尚はそのことを見通していたという  
から、さすがというべきであろう。師弟関係の緊密であったことがこ  
の一事で理解されるとともに、後生畏るべしというようなありきたり  
の表現では、とても言い表せない域にまで達していたわけである。  
ちなみに『莊子』外物篇には、「聖人の天下を駭（おそ）める所以は、神人

未だ嘗て過りて問わず」（金谷治訳注『莊子』四、岩波文庫、三二頁）と見え、「神人」は「靈妙な神的人格」で、「聖人が現実的な効果をもたらすのに対して、さらにそれを超越している」と注釈されている。私ども凡夫には想像すらできない境地である。「馭鳥」は、僧侶の食を奪おうとする鳥を馭る沙弥ということで、ふつう七歳から十三歳までの小僧を指す。

少年時代の様子がこのように神秘的な霧に包まれているのに対して、成長してからのちの経歴ははっきりしている。特筆すべきは、長崎の崇福寺で明の道者超元（？～一六六〇）に師事して、「今日、摩耶、悉多を生ずる」の偈を得たことである。「摩耶」は釈迦牟尼の母、「悉多」は悉達多、すなわち後の釈迦牟尼である。玄光のすごさを遺憾なく伝えるエピソードということができるだろう。

道者帰国後は、海雲山皓台寺の月舟宗林（一六一四～一七八七）に投じて曹洞宗を嗣ぎ、若狭で大蔵経を看閲したあと、宗林の推薦をうけて皓台寺四世を嗣いで、「儼そかに清衆に臨み、治めずして治まる。諸方畏服すること、諸山の士峯を環りて其の高潔を譲るが如し」と伝えられている。病をもってその職を辞してからは、筑前金丸、安房勝山、河内経山寺、摂津大道寺などに、あるときは庵を結び、あるときは寺を興して住した。その間、閑暇をあげて著述に専念し、『独語』以下の主著は『経山独庵叟護法集』に集成されたほか、ことに晩年、

経山老和尚、暮年の禅余、著述の余力、以て編集する所の者、三つ。止躁警誠録なり、続孝感編なり、擬山海経なり。

〔跋擬山海経〕、『擬山海経』五

として、挙げられた『止躁警誠録』（元禄十三年刊）、『続孝感編』（同十七年刊）、『擬山海経』（同十二～十五年刊）のほかにも、『戒殺放生

文編』（同十四年刊）などを編刊しているのは、「護法」の一環であると同時に、当時入手困難だった漢文テキストの提供を目指したものと考えられる。その意図を知るためには、中山が「擬山海経序」のなかで次のように述べているのが参考となる。

古書の多きこと山の如く海の如し。其の奇事怪迹、幾千万ということを識らず。就中、奇の記す可きを記し、怪の載す可きを載す。是れ所謂る古書多しと雖も、未だ必ずしも尽く美ならず、要は当に以て学者の山淵と為して、筆を属する者をして其の中に采伐し、漁獵することを得しむる者なり。且つ葛稚川が云う、衆書を抄掇して、其の精要を撮るは、力を用うること少なくて、取る所多く、思い繁からずして、見る所博しと。此の編の作も亦た復た是の如し。

「葛稚川」は晋代の道士、葛洪（二八四～三六三）で、『抱朴子』『神仙伝』の著者。そして巻頭にまず掲げられているのが「勸学」の一篇であるのは、編者玄光の意図を明瞭に伝えている。

先王の教えは孝より榮なるは莫く、忠より顯なるは莫し。忠孝は人君・人親の甚だ欲する所なり。顯榮は人臣・人子の甚だ願う所なり。然れども人君・人親の其の欲する所を得ず、人子・人臣の其の願う所を得ず。此れ理義を知らざるより生ず。理義を知らざるは、学ばざるより生ず。学者の師達して材有り、吾れ未だ其の聖人為らざることを知らず。聖人の在る所は則ち天下理まる。右に在るときは則ち右重く、左に在るときは則ち左重し。是の故に古の聖王未だ師を尊ばざる者有らざるなり。師を尊ぶときは則ち其の貴賤貧富を論ぜざるなり。此くの若くなるときは則ち名号顯



われ、徳行彰わる。故に師の教えは、軽重尊卑貧富を争わずして、道を争う。其の人、苟も可ならば、其の事可ならずということ無く、求むる所、尽く得。欲する所、尽く成る。此れ聖人を得るより生ず。聖人は疾学より生ず。疾学せずして、能く魁士名人と為る者は未だ之れ嘗て有らざるなり。

この『呂子春秋』第四巻からの抜粋は、玄光の基本的な立場をよく示している。『呂子春秋』はその名の示すとおり、秦の呂不韋（？前二三五）の編纂にかかり、まだその頃は「人君・人臣」といっても自由な時代だった。

さて「先王の教え」のなかで大切なのは「忠・孝」の二つである。誰しも願うそれを実現するためには、「理義」のあるところを知らなければならぬ。それには「学」が必要で、道を師として、聖人の言葉話し、聖人の行いを体して実践していれば、いつしか聖人と同じように生きることが出来る。否、それこそが「聖人」であることにはかならない。そこで「古の聖王」は「師」を選ぶのに慎重だった。その際の基準は「道」があるかないか、「人」に能力があるかどうかで、「軽重尊卑貧富」は問題にならなかった。人は「疾学」すなわち注に「疾は趨なり」とあるように、「学に疾く」ことよって「聖人」となり得るのである。

玄光はむろん、この一条を読んで学に志したのではない。学成って振り返ってみての確信であり、いわば生涯の結論だった。玄光の著述のあちこちで、同趣旨の文章に出くわすたびに、これは後人へのメッセージではないかという思いを強くする。古代からはるかに遠く、江戸初期の一七世紀になっても「軽重尊卑貧富」を問わず、ただ「学に疾く」ことが重要だと言いつつ人物が、玄光のほかにいただろうか？玄光が時代を超えていたと考えられる所以である。

## 2 東アジアの広がりの中で―道者超元門下の意味―

十七世紀、東アジアの政治情勢は激動のときを迎えていた。一六四四年に明が滅んだあと、替わって北京に入場した清軍は幼い順治帝を擁して、以後三百年近い時代の支配者になろうとしていた。その結果、周辺諸国の帰趨もおのずと決まり華夷秩序も形成されたが、海を隔てた徳川幕府への影響は間接的だった。仏教界の交流も戦国乱世を経て見る影もなくなっていた。そういうときに来日したのが道者超元である。道者は慶安四年（一六五一）に長崎に到着するや崇福寺に入り、そこで幾多の俊秀を教導した。

たとえば不生禅で知られる盤珪永琢（一六二二―九三）もそのうちの一人だった。盤珪は幼年時代にまわりで儒学が流行っていたので、儒者について『大学』を学習したところ、「明德を明らかにする」という箇所ですまずいて、それをいいかげんにしないで徹底的に追求し、身も心も憔悴のはてに、悟りを得たという経歴の持ち主である。

身どもが廿六歳のとき、一切事は不生でと、なふといふことをひよつと思ひ附きわきまへましてから、それが人に咄して見とふござつて、あそこへ行爰へ行て見ますれども、一切事が不生で調ふといふ事を思ひ附てより、天下に身どもが三寸の舌頭にかゝる人がござらなんだわひの。

（盤珪仏智弘濟禪師御示聞書、『盤珪禪師語録』岩波文庫）

盤珪は自ら開いた悟りを「証拠」立ててくれる師を求めて、長崎に道者を訪ねることになった。道者への面会に当たっては、それまで着ていた粗末な修行着を脱いで、初めて「ころも」を着たと伝えられているから、盤珪の真剣さが認められよう。

道者禪師にまみへまして、直に身どもがわきまへました通りを申てござれば、道者一見して則汝此漢生死を超りといはれました。其じぶんの知識の中では、まだ道者が此ごとく少ばかり、証拠に立てくれられましたが、今仔細にむかしを思ひますれば、道者も今日十分にはござらぬ。道者もし幸ありて、今までもいきて居られましたならば、よき人にしてやりましやうものを、はやく死なれまして、不仕あはせで御座る、さんねんでござるわひの。

（同上）

これを見ると盤珪は道者に対してほとんど対等、もしくはそれ以上の高みに立って接していたようだ。それに対して道者は次のような詩偈をのこしている。

贈永琢禪人 永琢禪人に贈る  
琢破玉鶏殻 琢破す玉鶏の殻  
鳳凰墮出来 鳳凰 墮出し来たる  
天人観上瑞 天人 上瑞を観る  
心眼自然開 心眼 自然に開く

（『南山道者禪師語録』）

「玉鶏」は玉の鶏で、瑞気の象徴である。「琢破」の琢の字は、盤珪の「永琢」を意識した措辞だろうか。「上瑞」は目出度いしるし、吉兆。「天人」は天界に属するものと、人間界に属するもの。「心眼」は物の真相を見る仏智慧。この偈を道者の語録に収録してもよいかどうか、玄光と恵極兩人から問い合わせがあったと「贅語」に見え、そのとき盤珪は「一に両手に去つて取るに任す」と答えている（『盤珪禪師語録』）。

盤珪の事績から知られる道者の動静のうちで見逃せないのは、次の記事である。

明暦元年、乙未、師、歳三十四。春、禅侶四五輩を領して、再び航して崎陽に抵りて道者禪師を訪ふ。禅師欲待するに優礼を以てす。時に大明黄檗の宗師東来し、その徒属牆に闘ぎ、各々門戸を立て、彼此牛角相容れず。

（『大法正眼国師盤珪琢大和尚行業曲記』、『盤珪禪師語録』）

「明暦元年」は一六五五年に当たる。その前年に来日した「黄檗の宗師」とは隠元（一五九二～一六七三）のことである。「闘牆」は親しい者どうしが争うこと。道者と隠元とは折り合いが悪く、道者を明に帰国させようという動きがあった。盤珪らはそれに対して、平戸に赴き松浦鎮信（一六二二～一七〇三）に藩内の普門寺に道者を招くよう働きかけ、金沢の鉄心禪師とも相談するなど、一二ヶ月のあいだに千里の道を往来して尽力したにもかかわらず、「此土の福薄くして道者は遂に明に回る」（同上）と記されている。ちなみに「法語補遺」には、

身どもが道者の会下に居りましたとき、身どもらも、その談合の人数に加はつて、唐土隠元禪師を請待にまつたことござつたが、  
：長崎の津口へ、おつきやりまして、ござつたによりまして、身共らも迎ひに出ましたが、その節、隠元の船より陸へあがります時、早直に隠元は不生の人でござらぬ事を見付けました故に、始終隠元には、一度もついて居ませなんだ。（『盤珪禪師語録』）

と記されていて、盤珪にかかるとは隠元の盛名も形無しである。そう

いうことでいえば、盤珪は独庵玄光にも点が辛い。まえに『道者禪師語録』に触れて引用した続きの部分に、次の一条がある。

他後、光禪師復た師に寄するに、自撰の独庵独語集を以てす。師酬答なし、月を経たり。侍者焉を曰ふ。師曰く、「老僧酬ゆることなきものは棒を奉ずる也」と。抑も経寺独庵玄光禪師は道学優富にして一時に名望の宗師なり。而して苟も師の此手段あるに到りては、人皆な驚異せずんばあらざる也。蓋し惟ふに善知識の抑揚褒貶、賊意多きのみ、其端倪を見難し。  
〔贅語〕

「他後」は、いずれ後にいつか。盤珪のもとに届いた『独庵独語』は盤珪の心には届かなかったようだ。「酬答」がないのを訝しんだ側近が尋ねると、なんと返事がないのは「棒を奉ずる」棒で打擲するのと同じだということである。誰しも認める「名望の宗師」にこれはまたどうしたとと世人が「驚異」したのも無理はない。「抑揚」けなすことと、褒めること。「褒貶」も同じ。「賊意」は人を損なおうとする気持ち。「端倪」は予知予測。まことに「善知識」の心の内は量りがたいものである。

こういう懸隔には、考え方の違いとして、  
惣じて近代の知識は、道具をもつて人を接して、道具でなければ、埒は明ぬものゝやうに思ひて、道具なしに直路にさし附て、しめす事をしませぬわひの。  
〔盤珪仏智弘濟禪師御示聞書〕

というような背景があったかもしれない。盤珪はさらに、「不生の示を結句早く肯ふ人は、不学の人に多く、博学の人ほど少し。不学の人早く肯ふこと多き所以は、不学人は習ひつ聞きつして、覚えて居る

くらべ物の道具言句がなきゆゑ、くらべて僉議することなければ、示の儘で直に肯ふ故に、是を以て不学の人に肯ふ者多きなり」といっている。いうならば、虚仮の一心ということであろうか。いずれにしても独庵玄光とは丸反対の行き方だった。

酬皓台寺月舟禅盟請衆齋

（皓台寺月舟禅盟の衆を請じて、齋するに酬ゆ）

多生有约会天淵	多生 約有り 天淵に会す
此日竜華豈偶筵	此の日 竜華 豈に偶筵ならんや
托露満盤香異味	托露満盤 異味香し
却嗟無可酬齋銭	却て嗟す 齋銭を酬ゆ可き無きを

「多生」はこの世に何度も生まれ変わってくるまでに結ばれた因縁。俗に袖振り合うも多生の縁という。「天淵」は天と淵で、隔たっているたとえ。「竜華」は、釈迦が入滅してより五十六億七千万年後に、弥勒菩薩が現れて竜華樹の下で悟りを開き、三度にわたって法会を開いて衆生を済度すること。「偶筵」は予期せぬ集まり。「齋銭」は法会の料。やがて玄光は月舟の法嗣となつて、皓台寺に住することになる。玄光はさらに後になつて「南山道者禪師語録序」（貞享三年、一七四六）にこう記している。

師、国を去りて後、廿余歳。予、因みに間遊して撰州に來たり、昔年の同じく道者に侍奉する者の慧極禪師を訪ひ、夜話、道者禪師に及びて、慧極記録する所の道者語録二冊を得て、香を焚いて捧読すれば、恍然として再び道者の警咳を今日に聆くが如し。俄に其の中の梓行す可き者を揀びて、一卷と為し、劔剱氏に付し、

世に公にして、世をして紙伝弘伝の外、更に真参実悟の禅師有りて、来たりて此の土を化し、此の土の福薄うして栖栖として国を去るを知らしむるなり。嗚呼、予、道者に依附すること八九年。其の間、一語の玄妙<sup>りしやう</sup>性に渉る無く、一行の有漏生滅に流るる無く、予をして今日に至りて、足を陰界<sup>おんがい</sup>の表に発し、仏祖の藩籬に遊ばしむる者は、皆な師の左提右携の致す所なり。粉骨碎身も未だ酬いるに足らざるなり。

「紙伝弘伝」は紙切れ坊主とでも言うべきか、中身のない形ばかりの仏者のことで、「真参実悟の禅師」の対極にある。しかし、本物は往々にして受け入れられないという悲劇がこの場合にも起きてしまった。

まことに「此の土の福」は薄かったわけであるが、それだけに盤珪や玄光のような様々な俊秀が道者のもとに参集したのは、そうしたなかであって奇跡的な僥倖だった。道者においてなによりも貴いのは、いかなるときも言葉が「玄妙理性」に渡らず、「有漏生滅」の行いがなかったことである。玄光はそのおかげで、その後の二十数年間、師の行き方を踏襲して仏者として生きてこられたというのである。「玄妙理性」は奥深く微妙な道理。「有漏」は煩惱で、これを脱しきらないと凡夫のままで悟りには到達しない。「陰界」は五陰と十八界。前者は色・受・想・行・識で、後者は六根・六境・六識。「八、九年」もあいだ、こういう師のもとで修行した玄光の後半生はそれ以前の人生と比べてどのように変わっただろうか。

### 3 文人大名群像―玄光の交友―

仏者と大名とのあいだの接点は、現代人の目にはほとんど見えてこない。しかし將軍綱吉のブレンだった、必ずしも評判のよくない隆光（一六四九―一七二四）の例に明らかなように、仏者と大名のあい

だの距離は意外にも近かったようだ。玄光の著述にも複数の大名の名前が散見する。まず「若州慧日山観世音記」を読んでみよう。

寛文壬寅夏五月、畿内北陸の地、大いに震う。山郷、山の邑を圧する者有り。水郷、滄波の土阜を突起する者有り。此の夜、若狭の国三方郡氣山村の湖水、漫漲して村落を漂溺す。蓋し湖の下流、水底突起し、湖水、故道を失うなり。民、未だ其の然る所以を知らず。訛言す、海漲りて国土を没すと。老を扶け、幼を携えて、山に趨りて水を避く。湖水を回観するときは、則ち熾然として光明を発す。

〔独庵藁〕四、『護法集』一〇）

これは寛文（壬寅）二年（一六六二）五月の京畿大地震の様子をありありと伝える記録としても読めそうだが、私たちの関心は別なところにある。このとき湖底で「光明」を発するものがあり、出てきて人を「吞噬」するなどという噂が立ったにもかかわらず、「民家の老僕」で「性、愚にして怯<sup>たふ</sup>き者」が物に取り憑かれたように水中に飛び込んで、「光物」を取り出してみると、観世音菩薩の銅像だった。村人は驚いて「県正」に届け出、やがて「国主」すなわち若狭小浜藩主・酒井忠直に報告された。忠直は湖の北側に慧日山を開いて「閣」を建て、菩薩像を安置した。それから二年後に、大蔵経閲覧のために若狭を訪れた玄光は、当時江戸にいた忠直から慧日山をその眼で見て、「大悲示現縁起」を執筆するように依頼された。そこで十一月十一日に「近侍貞則」の案内で三方に出かけ、慧日山に登った玄光は、菩薩像を拝観して、「像の長、尺に盈たずして、法相具わらざる所無し。其の閣、鉅麗を必とせず、堅貞にして、久遠に伝う可きを取るのみ」と記している。その像が出現した所に行ってみると、まわりは耕作地で、「水中放光の素聞」と違うので地元の人に確かめると、今は耕作地でも地



震のときは「湖水」だったことがわかった。玄光は続けて次のように記す。

国主、親しく臨みて庫蔵を開き、財穀を散じ、卒を發すること、日に数千、山を鑿ること累歳、狂流を海に導いて、湖水減ずること半ばなり。湖の左右、作（たがやしおき）む可き者、百余頃。百姓、今其の利を饗く。今、湖辺の村、生倉いまくらと曰い、成出なりでと曰う。並びに故と湖水なり。湖の名を問うときは、則ち水月みなつきと曰う。蓋し酒公の親しく命ずる所にして、大悲靈像の此の水に出現することを志すと云なり。

そうして忠直が拓いた浦見川の急流を舟で下って宝泉院に泊まって「記」の執筆にかかったところ、庭から「奇なるかな」という声が聞こえてきた。間もなく院主がやってきて、「前山、非常の奇雲を生ぜり」というので、戸外に出てみると、「奇雲一道、矢筈が嶽に起ちて橋の如く、慧日山に通ずるを觀る。其の色、白虹の如く、光明の如し。蓋し世に所謂の瑞雲なる者か」というようなことがあった。「白虹」はふつう、白い虹が太陽を貫くと人の真心が天に通じた証とされ、いずれにしても吉兆である。あたかもよし、このことを貞則が「并せ記す」ように勧めるのを、玄光は「予、俗僧の好んで祥瑞を道う者を醜みにくんで、記することを欲せず」と一旦は拒否している。しかしかさねて、「枉かまがれるを矯めて直きに過ぐるときは、則ち其の患い枉かまがれると等し」とまで言われて思い直し、この「記」が出来上がった。

ここにも玄光の「俗」嫌いが随処に表れている。地震のさいに「海漲うしほって国土を没す」などと、もとより信じてはいない。水中から出現したはずなのに、行つて見ると畑だったのをまず疑問とする。「白虹」を目の当たりにしても、やたらに「祥瑞」を言いふらす「俗僧」を端

から信じようとはしていない。しかし依頼者の気持ちを考えれば、無碍むがいに否定するわけにもいかなかったのであろう。「記」の最後は、次のように締めくくられている。

国主、姓は酒井氏、名は忠直。其の父忠勝、国政を与り聞き、若狭の国に封ぜられ、忠直封を饗く。世篤く仏に奉ず。忱信痛敬の致す所、奇雲当に無知の類に非ざるべきか。

「忱信」はまことに信じること。しかし、「奇雲当非無知之類乎」を一見して印象に残るのは、「当非…乎」の弱々しい問いかけより、「無知之類」の強烈な字面である。これはいかなるときも玄光がその志操を変えることがなかった一例である。そして、この点が諸大名の信頼を得た理由だったのでなかるうか。

忠直が没したとき、玄光は「修理大夫酒井公哀辞、並びに序」をつくり、次のようにその死を悼んでいる。

光や釈氏、身を世外に安んじ、心を二空に遊ばしむるは、宜しく哀しむこと有るべからずして、哀しむ者は何ぞや。蓋し其の旧徳を感じ、哀しみに託し、之れに辞して、公の潜徳を揚げ、公の幽光を發し、之れを後に伝えんと云なり。

「二空」とは我法二空のことで、我が身は五蘊仮和合なので実体はなく、諸法もまた実体視しないことをいう。こうして執着を離れた身に「哀しみ」はないはずだが、「旧徳」を思えば、忠直の在りし日の姿を後世に伝えたいという気持ちも抑えがたく、続けていう。

堂堂然たる勇姿、浩浩然たる氣宇、千金を芥あぐたばかりにして、一毫

の秘吝無く、齷齪の町畦に拘らず、区々の拘攣を擺脫し、士大夫中の一豪英、世の公に得る所の者は是れのみ。上に奉ずるの忠に明暗無く、造次を貫き、顛沛に徹するときは、則ち予曾て之れを驪黄牝牡の外に得て、今日、哀しみて之れが辞を為る所以なり。

「町畦」は境界。「拘攣」は拘束。「擺脫」は束縛から抜け出すこと。「造次顛沛」は咄嗟の場合。つまりは生きる姿勢にブレのないことをいう。「驪黄牝牡」は馬の色や雌雄などの表面的な事柄。

（以下、次稿）

（付記）小論はもともとF社の「肥前佐賀文庫」の一冊として、同社文化事業推進室のF氏の依頼により書き始めたものである。当初の予定ではもうとっくに書き上げて刊行されているはずのところ、例によって荏苒と時が流れ、いよいよ取りかかろうとしたとき、今次の米国に端を発する金融危機の煽りを受けて、文化事業の継続が困難になったという連絡を受けた。今秋（二〇〇八年十月）、パリのグルベンキアン財団のカンファレンス（Colloque International Le Regard Eloigné L'Europe et Le Japon-XVI<sup>e</sup>-XIX<sup>e</sup> Siècle）でお会いしたフレデリック・ジラル（Frédéric Girard）先生に、玄光についてのフランス語の論文があることを教えていただき、帰国後、その著者であるミッシェル・モール先生からインターネットでその電子版を送っていたのだいた矢先のことだった（Molr, Michel. 2002 "L'HÉRITAGE CONTESTÉ DE DOKUAN CENKŌ TRADITION ET CONFLITS DANS LE BOUDDHISME ZEN DU XVII<sup>e</sup> SIÈCLE." In REPENSER L'ORDRE, REPENSER L'HÉRITAGE PAYSAGE INTELLECTUEL DU JAPON (XVII<sup>e</sup>-XIX<sup>e</sup> SIÈCLES), edited by F. Girard, A. Horuchi and M. Macé. Paris-Genève: Droz, pp. 209-263)。なぞ、モール先生へのアクセスには、当

時ハワイ大学滞在中の旧友ローレンス・マルソー（Lawrence E. Marceau）氏の助力を得た。そこで、とりあえずこれまで書きためた部分を活字にしておくことにした次第、第3章の途中で唐突に終わっているのはそのためである。念のために、ここに予定目次を記しておけば、

#### 序

- 1 独庵玄光とは誰か？
- 2 東アジアの広がりの中で―道者超元門下の意味―
- 3 文人大名群像―玄光の交友―（未完、以下次稿）
- 4 独庵玄光のメッセージ―三百年後の読者に―

（付 参考文献）

という構成になる。今後、書き継いで成稿の暁にはFさんと相談して、本小伝の身の振り方を改めて考えることにしたい。

それにしても、このお話を三年前にFさんから聞いたとき、私には旧稿「独庵玄光の世界―人と文学―」（『独庵玄光と江戸思潮』ペリかん社、一九九五年、所収）以上のことを書く準備も、そのつもりもなかった。それが熱心なおすすめに動かされて調べ直しているうちに、たちまち玄光の魅力の虜となった。そこで新たに鍋島直條との交友を調べるために、祐徳稲荷神社中川文庫に赴いて、井上敏幸先生のお世話になりながらF氏とともに関係資料を何百枚も撮影したり、また文中にも触れたように佐賀県立図書館の大園隆二郎氏には玄光ゆかりの場所に案内していただいたり、かつて鷗外も立ち寄ったという松川屋で口底などの珍味を御馳走になったことどもが、こうして付記を書いていると懐かしく思い出される。すべて玄光による縁に連なっている。この縁を大切にしながら小論を書き継ぎたいと念じている。